

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

e-mail: shakaiushin@city.com

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポルビル九〇号 電話(03)3377-4649 FAX(03)3299-5367

振替 〇〇一〇〇一九一五八四三二 労働中央労働金本店 No.1154163

購読料 月額700円 6ヵ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

究極の労働法制改悪を阻止しよう!

○六年末労働政策分科会で残業代た取り制度導入を決定

稲村 守……………2

政治と戦争

—イラク戦争に関連して—

滝野 忠……………3

キビシイドリが大繁殖……………4

「靖国」から「安国」に

—「九条」は「共生」の覇権の理想—

會田 浩二郎……………5

品川の「教育改革」による被害

伊藤 光隆……………7

ようやく本部・未提訴団員が提訴

—いちばんの弱点は本部の無節操さか—

国労紋別闘争団……………9

私と社会通信

—仲人は灰原茂雄さん—

赤峰 正俊……………11

読者からのおたより……………12

編集部だより……………10

旬刊 社会通信

NO. 989

二〇〇七年一月二二日号

二〇〇七年一月二二日発行
(毎月一日・二二日・二二日三回発行)

究極の労働法制改悪を阻止しよう！

○六年末労政審分科会で残業代ただ取り制度導入を決定

「ホワイトカラー・イグザンプション」に絞られた

日本経団連の強い意向を受け、厚生労働省は究極の労働法制改悪案を、昨年十二月二七日の「労働政策審議会労働条件分科会」で決定答申し、今年の通常国会に提案しようとしています。ポイントは、「自由度の高い働き方にふさわしい制度の創設」、いわゆる「ホワイトカラー」の残業代をただ取りする制度の導入です。

年も押し詰まった昨年十二月二七日の夕刻、労政審労働条件分科会会場前で、ナショナルセンターの枠を超えた全国の働く仲間の代表は「使用者、労働者委員の間で意見が全く違うのに、なぜとりまとめることができるのか。暴挙は許せない」と厚生省のビルに向かって声をからして訴えました。

労働者側委員の反対を押しして、この日決定された「報告」では、「就業規則の一方的変更による労働条件の不利益変更の問題」は「判例法理に沿って明らかにする」ととされ、「整理解雇」「解雇の金銭解決」は「引き続き検討することとなりました。したがって、大きな問題は日本のホワイトカラーイグザンプション制度の導入、すなわち「自由度の高い働き方にふさわしい制度の創設」に絞られてきたといえます。

「報告」では対象年収額を示さず、今夏参議選後に政省令で決めるといふ卑怯なやり方ですが、私たちはこれを「残業代ただ取り制度」「過労死促進法」として、断固反対して闘わなくてはなりません。

一方、労働者側が要求してきた整理解雇の四要件の法制化や、残業代割増率アップや有期雇用の規制などはすべて見送られました。

「残業代ただ取り制度」「過労死促進法」とは

この審議会報告では対象者を「管理職の一步手前の人を想定」とし、①労働時間では成果を適切に評価できない、②重要な権限・責任を伴う、③仕事のやり方などを使用者に指示されない、④年収が相当程度高い、を挙げています。

労働総合研究所は昨秋、「日本的ホワイトカラー・エグザンプション」が決定されたら、年収要件が四〇〇万円の場合一人当たり年間一四万円の損失を被り、全体では一兆六千億円にのぼるといふ試算を発表しました。これは消費税の約5%分もの搾取強化となります。年収要件はいろいろな説がとびかっていますが、「小さく生んで大きく育てる」とも言われています。金額は政省令で自由に決められるようにしようとしています。いずれにせよ長時間労働を野放しにして、労働者に過労死を強いる制度です。年収要件の多寡を問わず、この制度導入に反対しましょう。

これは、「憲法改悪国民投票法案」と並んでこの春最大の闘いの課題です。労組は〇七春闘で、この究極の労働法制改悪に反対する一大大衆行動を展開しよう。

(稲村 守)

政治と戦争

―イラク戦争に関連して―

戦争は権力、国民国家の政治・経済的力拡大のための最大の手段である。近代文明社会になってから古今東西の支配者たちの最大関心事は国家統治の術である。術を支配者に示したのが軍事戦略書、たとえば『孫子の兵法』『君主論』である。戦争論を近代市民社会「フランス革命後」にあつて体系化したのがクラウゼヴィッツ（一七八〇～一八三一）である。クラウゼヴィッツは戦争をこう定義する。

「戦争は一種の強力行為であり、その旨とするところは相手に我が方の意志を強要するにある。このような強力行使は、諸種の技術および科学の一切の発明を援用して装備に努め、もって相手の強力行使に対抗しようとするのである。戦争においては、かかる強力行為、即ち物理的強力行為は手段であり、相手に我が方の意志を強要することが即ち目的である。ところでこの目的を達成するためには、まず敵の防禦を完全に無力ならしめねばならない、そして強力行為という建て前から言えば、このことこそ一切の軍事的行動の目標である」（『岩波文庫版』）。

政治と戦争との関係についてはこうである。

「戦争は、政治的行為であるばかりでなく、政治の道具であり、彼我両国のあいだの政治的交渉の継続であり、政治における異なる手段を用いて、この政治的交渉を遂行する行為である」。

国家、そして権力、軍隊の本質を根本から考えることを忘れた人、忘れさせられた人は、軍隊をコントロールできるかのように「善意」から幻想する。しかし、クラウゼヴィッツは戦争にあつては①国際法による制限は微力でほとんど言うにたりないものであること、②善良な心情―人道主義者たちが口にするそこまでやらなくても―といった意見を「謬見」「最悪のもの」と一刀両断する。権力闘争、戦争とは生きるか死ぬかの極限状況であることは、アフガニスタン、イラク、パレスチナでの状況が「部分的」であるが十分すぎるほどに示しているではないか。

イラク、アフガニスタンで米軍、NATO軍はなぜ治安を維持できないのか。完全に「敵」を打倒できずにいるのか。イラク、アフガニスタンの抵抗力を見誤ったからだ。抵抗力は二つの要素からなる。一つは戦闘員および兵器の量、もう一つは戦闘員、民衆の意志力の強さである。アフガンそしてイラクでは国民は武装していた。アフガン最大の商品が銃器であることにも明らかだ。政府軍にも「敵」がいる。「敵」は敵に武器を横流しする。こうして、武器は補充され続ける。四年にもなるのに戦闘が激化の一途を辿り、米国の大統領、現地司令官が内戦「状況」と言わざるを得なくなつたのは、その証明だ。

個々の戦闘で犠牲になるのは誰か。兵士以上に民衆だ。民衆の米軍への憎悪は高まり「意志力」は高まっていく。宗派、民族の葛藤は混乱をいや増していく。米軍はイラク、アフガニスタンで戦争している。戦争に勝つためには国民の支持が必要だ。だが、両国民は米軍を支持もしていないければ、歓迎もしていない。戦死者、戦傷者はふ

えつづけ、米国内でも厭戦気分は横溢し、ブッシュは中間選挙で負けた。ブッシュはその名のとおりに「藪」に踏み込み、にっちもさっちもいなくなつた。しかし、軍を撤退させることはできない。イラン・アフガンでの民衆の意志力はさらに高まる。撤退は米国の敗北となり、米国の権威はさらに弱まる。

戦争に用いられる力とは何か。①本来の戦闘力、②面積と人口を有する国土、③同盟諸国である。戦闘力(戦力)とは兵士と兵器体系からなる。ちょうど生産力が労働力と生産手段の結合で生まれるようにである。兵士の訓練度、兵器の優劣が戦力の主要素となる。「戦争目的」を確信しえなくなつた兵士の戦闘力はゼロに近くなる。

イラクは二千万の人口をもつ。十三万の軍はイラクのだれをも信用できぬ。すべてが敵だ。子ども女性すら、さらには馬や牛といった家畜さえも。兵士身を守るため、だれにも発砲する。イラク国民は殺りくされつづける。米軍への敵意は増し、米軍はさらに孤立する。同盟政策(有志連合)もほぼ解体状況となつた。イタリア、スペインは撤退し、米国の同盟国はオーストラリア、イギリス、日本だけとなつた。この面でも、米国は全面的に敗北したのである。

自衛隊は「軍」だ。軍は敵の殲滅をめざし、死人が出るほど訓練する。実践に近づけば近づくほど事故、死者(殉職者)が増える。権力は彼らを「二階級特進」で優遇する。軍は敵を殲滅、人殺しを訓練する暴力装置であり、自然災害や他の突発的大事故の人命救助の組織ではない。日本国憲法は絶対平和主義を掲げ、戦争放棄、軍備(戦力)および交戦権を、前文と五条で否定する。憲法「改正」の最大の背景である。

キビシイドリが大繁殖

一九八七年四月(国鉄分割民営化)を前に「国労叩き」が日本全土を覆つたのを目撃し、あんな覚えちよつた。

若しは、子供ん頃のことじゃつて、知らんしが多かと思うが、そりゃひどかつたど。

我々人間じゃ、「カラスが鳴かん日はあつても、国労こつがテレビ、新聞が取りあげん日はなか」ち、よう言つとつたもんじゃ。

もう二〇年もたつとじゃが、そりゃひどかつたもんじゃ。

とこいで、前総理の小泉わろが「公務員が悪り、郵便局民営化すつたつ」ち言つせえ、やいかぎいのこつやつきたが、そいに郵便局じゃ管理者しも悪乗りをして、事あいたびに「キビシイ」「キビシイ」ち言でけたが、最近じゃ役職のしずい「キビシイ」「キビシイ」ち言でけつ、そりゃひどもんじゃ。

我がたちや昼飯もそこそこ食て仕事しちよつて。そんうえゆうパツクや葉書も自腹で買つせえ協力させらつせえ、キビシたこつちんほじゃ。

東京ん霞ヶ関で異常発生したキビシイドリ(変鳥・キビシイ鳥)が、「キビシイ」「キビシイ」ち吠えたくつ、日本全土に大繁殖しちよごたつ。キビシイドリがこい以上繁殖したずいたいへんなこつじゃ。みんないけん思け。

(JPU鹿児島北部支部ニュース「仲間たち」七七号)

「靖国」から「安国」に

—「九条」は「共生」の窮極の理想—

間違った歴史挑戦

小泉氏が総理在任中度々、靖国神社を参拝して、内外に物議をもたらし、揚げ句は八月十五日に行つて仕上げをした。本人はあくまで信念の行動のつもりだったろうが、憲法上の立場からは、日本国の首相がやる事ではなかった。間違つた歴史挑戦の姿勢だったのではと、感覚的に私は受け止めている。

昭和天皇の「私言」が日経新聞で報道された後だけに、下馬評は注目的だったが、まさか天皇を越える気があつたとも思えない。テレビで見ると、公用車を降りてるのはいいが、お参りの仕方は、当の靖国神社側がよく何も云わなかったものだ。完全に「神社参拝」の「レイ（礼・例）」からはずれていた。

お宮にすれば、首相参拝から国費補助の道が開ける事に、なつてくれればが本心だろうから、敢えて云わなかったのかも知れない。

因みに蛇足ながら、前述の日本経済新聞の元は、佐渡相川出身の益田孝が作つている。「三井」の創始者と云われる、日本実業史の一方の雄だった人である。

いずれにしても世の中、全て相手のある事は、いつの時代でも変わらないもの、逆なでする様な言動は、一国の総理（代表）として配慮がなさすぎる。安倍内閣に代わっても尾を引く現状は、無責任だったとのそしりは免れないだろう。

テレビドラマや映画などで見る、「ヤ印がケンカ」を売るのに近いのではないか。

「参拝」と「解散」は、小泉純一郎個人が総理の立場で残した、やはり大変な問題ではある。

郵便局「民営化」で

解散とは云う迄もなく、郵政民営化を問うたもので、策に溺れさせなかった選挙民に、最終的な責任があるにしても、「バクチ」を打つた感否めない。法には触れなかったろうが、歴史的状況ではかつて、大乱闘国会があつた時、マスコミが危機感から共同声明を出した事を思いですが、質的にはそれに相当するものだったと想う。「民営化」後の不便さの説明は、殆どせずにやったのだから、全く乱暴な話で、チルドレン劇場に至つては、一種の衆愚政治に見えたが、最近の復党報道を読むと、自民党心の政治にバカにされている感が、増々強くなるのを押え様もない。

先の不便は無集配に変わる郵便局が、それぞれに増えている事にもう現れているが、次には廃局が始まるだろう。「民営」なら、「赤字で経営が続かないのでやめます」と云つても通るだろう。国鉄が民営に変えられたのとは違う面もあるが、経営側の本質としては共通する点がある。鉄道以上に地域に広がっている郵便局の場合、利用側にとっては単なる不便を越えた問題に、いずれ当面する恐れもあるう。

郵便局の民営化は肯定出来る経過、結果ではないが、靖国神社は「民営」でよからう。信仰する私人、団等が、維持まで想定してお参りに行けばいい。呉々も「公」の

参拝、援助があつてはならないのは、再言するまでも無い。

天皇制そしてフセイン

お国の為に、「靖国」に祭るからと、最期は「天皇陛下バンザイ」叫べなどと、時の大日本帝国政府が国民を、戦地へ送り込んだのが、第二次世界大戦に代表されている。

敗れて米軍統治の中、「九条」を柱に新憲法が施行されたのも束の間、あの「朝鮮動乱」が起きた、のか策略で起こされたのか、今に至る「北」の現状がある。大戦で分断された三つの国の内、ドイツは東が西に、ベトナムは南が北に復元されたが、「朝鮮」は残ったままで、しかも状況は悪化の一途だ。

その元を作つて来た明治以降の日本政府は、歴史的責任を真剣に負うどころか、「北」のやる事に悪乗りして、「九条」に苦情を云い、窮状に追いやる算段を繰り返して、違反の軍力強化の道を走っているのではないか。

一方では、「菊の御紋」に象徴される「天皇」は残したが、「イラク」を見ると、「アメリカ統治」の違いが感じられる。マッカーサー占領軍は、自信の無さとも思えるが、天皇制廃止には向かわなかつた。国連を無視してイラク攻撃をやつたブッシュ大統領は、王制だつたら踏み切れたか？「頭は切れた」様だが、疑わしきを罰したようなものだった。

日本の場合は先手を打つて始めたのだから、廃止される覚悟を持つた人も居たのではなかつたらうか。憲法上「象徴」とし、反省からの国事行為制限となつたが、今は菊の紋を散りばめた「竹のカーテン」を、又も下げそうな空気を冷たくかんじられる様になつて来た。

「国」に世襲の代表は、果たして本当に必要なものかどうか？一個の家なら許容されても、どんなものだろうか。「国家」の場合は、先をよく見て考えて行きたい。

佐渡の歴史と人物

「天皇」に関しては佐渡から「2・26」事件で、思想的リーダーだと処刑された北一輝。明治初期「不敬罪」を問われ、獄死した有田真平が出ている。古くは順徳上皇が流された島でもあるので、生まれも育ちもそして今も住む佐渡者（もん）の一人として、「天皇・制」に対する関心は、並ではないつもりで居る。

有田真平の養子が有田八郎で、母校相川小学校の一隅に、「何より平和」の碑がある。四度の外相を務め、先の大戦末期に終戦をとの上奏文を出している。戦後は代議士にもなり、都知事選に出た時の事は、三島由起夫「宴のあと」裁判で知られている。それに「プライバシーでは」と、弁護士を通して助言した事を、同じ相川出身の憲法学者久保田きぬ子さんから聞いたのを思い出す。

国連代表大使でニューヨーク赴任時、安倍首相の父晋太郎外相に会つた話も、重ねて思い出すが、「九条の戦争放棄」で私の考えを聞いてもらった事が忘れられない。

「国権の発動」には自衛も他衛もないこと、故に軍隊は持たないのは当然等々、話させてもらった。

現下の国情の危うさに、相川小学校間近の久保田家墓地に眠る久保田さんは、どう想われるだろうか。有田八郎碑でつながるその相川小学校は今、世界遺産への運動を子供達が、一生懸命に取り組んでいる。

「佐渡金銀山」は歴史的施設の保全維持とは別に、出身人物の質的高さをも評価されていいと考える。尚「遺産」は相川だけでなく、島内では他に三小学校が運動に参加している。

その子供達に教育基本法「改正」をどう、教えられるのか、話しが出来るのだろうか。再び戦場へ送る動きが、仮ではなく始まっている。選挙権のある大人達が、歴史への責任を背負って、一票を使う時だろう。でないと国を安んずるところか、「暗国」の現世が生じる恐れを強く持つ。

戦争に備えてのエネルギーを使わずに何故、しない為の力を合わせないのか。負けた結果に「九条」が在ろうと、数百万に及ぶ直接の犠牲者は、一番世界の平和を泉下で願っているのではないか。「共生」の究極の理想だと受け止める、それが今の本当の立場だろう。

(佐渡市・倉田 浩二郎)

品川の「教育改革」による被害

一、はじめに

一九九九年から品川の「教育改革」は始まった。

具体的な成果を明確に打ち出す成果基盤型の学校経営へと教育の質的転換（教員の意識改革）を図る。

・学校は、特色ある教育活動を展開するよう命じられ、活性化と質の向上をめざして競争させられることになった。

均一性、平等性を重視した教育から、格差を認め、エリートのためのグローバルな能力主義教育への転換。

二、学校選択による被害

学校選択は、「教育改革」を進めるための起爆剤だ。

「選ぶ」ことが重視され、「育てる」ことは軽視。

・「とにかく、選べるようになってよかった」という保護者の意識。

(自由を与えられたかのような幻想を持った。)

・選ぶ基準は、①特色、②安心・安全、③進学

・中学校には、十数校の小学校から生徒が集まる。(小中連携の希薄化、生活指導の広域化・困難化)

・問題があれば、「他の学校へ」。(五〜七%)

・学校づくりが、今いる子どものためから新入生を増やすためのものに。(見えるところ重視、じっくり子どもと向き合えない。)

三、格差是認・能力主義教育による被害

- 「学力テスト」（学校・区・都・国）の点数向上のための授業。
- ・興味や問題意識を引き出す授業から、効率的に教え込む授業へ。
 - ・即点数アップの読み・書き・計算重視。
 - ・「この子がいなければ平均点が上がるのに。」（教員）
 - ・「学力テストの日は、休ませましょうか。」（保護者）
 - ・「去年より平均点が下がったクラスは…。」（校長）
 - ・「本校は区内です。学力向上のために対策を。」（校長）
 - ・「分けること」「分けられること」が当たり前に。
 - ・成果よりも格差是認の意識改革。（できる・できないで分けてよい）
 - ・少人数学習、習熟度別学習は、成果よりマイナス面が多い。
 - ・時間割に自由度がなくなる。
 - ・教科書通りの工夫のない授業。
 - ・子どもたちに優越感や劣等感が。
- 楽しい授業を受けられない子どもたち
学力の格差は、どんどん拡大！

四、独裁者の校長による被害

- 校長の変質ぶりは凄まじい。
- ・名誉職的存在から成果を競争させられる経営者に。
 - ・成果によって、学校の予算にも大きな差が。
 - ・「選ばれる学校」「ほめられる校長」をめざした実績づくりに猪突猛進。成果を上げないと「特別支援学校」に指定される恐怖。
- 成果を上げない教員には「異動」をちらつかせる。本人の意思とは関係なく異動も。教職員との対話はなく、聞く耳も持たず、怒鳴り散らすだけの「独裁者」のような校長も珍しくない。

五、現場の教員に支持されない「教育改革」

- 「品流し」と恐れられて。
支持されない理由は明白。
- ①学校現場の声を無視した、トップダウンによる一連の改革導入。導入後も現場の声を聞いて改善しようとする姿勢が全くない。区教委と学校現場との間に、信頼関係はない。
 - ②一連の改革が、競争主義、能力主義に基づくものであり、格差拡大をもたらしているから。学校同士や教員同士の競争の激化、学校間や子どもの間での格差拡大を、現場の教員は支持しない。
 - ③次々と打ち出される改革が、凄まじい教員の多忙化、労働強化をもたらしているから。どんなに努力しがんばっても、競争が続く限り、より以上の成果が求

められ、限界のない努力を積み重ねなければならぬ。毎日、八時、九時まで残業をし、土、日も休まずに仕事をしても、「もつとやれ」と言われる。

病休を取ったり、若年退職をする教員が増えている。

「教育改革」が進むにつれて、「非正規雇用者」が増えている。

・低賃金で長時間働かされる講師も大変である。

「教育改革」とともに、仕事は増え続ける。

政府自民党は教育基本法の改悪を強行し、教育改革をさらに推し進めて、「戦争のできる国づくり」をめざしている。

総力を挙げて阻止しよう！

(伊藤 光隆)

ようやく本部・未提訴団員が提訴

―いちばんの弱点は本部の無節操さか―

私たちは「年内解決」を目指してこの一年間様々な取り組みを一つずつ取り組んできましたが、残念ながら年内での解決には至りませんでした。前進した面もありますが、目標に達しなかった点も多くあり、結果として現状があります。そんな中でようやく一二月五日になって本部と未提訴の闘争団員・家族五四〇人が損倍だけの訴訟に踏みきました。記者会見では本部の訴訟に対する姿勢に「???」の反応もあつたようです。いずれにしても中途半端な姿勢では反対に足かせになりかねないだけにしつかりやってほしいものです。

やっと実行した本部提訴

昨年九月の鉄建公団訴訟地裁判決から一年以上経過した一二月五日に、国労本部と未提訴闘争団員がようやく鉄道運輸機構を相手取った損害賠償の訴訟を提訴しました。この訴訟はもともと一二月二〇日の鉄建公団訴訟控訴審開始前に提訴することが、関係団体との間で了解事項になっていました。ところが、一月上旬に「ILOから政府に強く解決を迫る七回目の勧告（実際には報告）が出る。その直後に提訴すると政府に逃げられる」との話が持ち上がり、一度は提訴を延期することを中央執行委員会決定してしまいました。

驚いた当事者や共闘関係者の抗議（？）が集中したことに再び動揺した本部は、結局十一月末になって再度年内に提訴することを判断し、一二月五日の提訴になりました。おそらく国交省方面から「裁判をするなら政治解決には応じられない」とのゆきぶりがあったのでしょう。肝心なところで動揺する姿は私たちからみても不安を感じます。なによりも今回の動揺で、本部は関係者や支援の仲間の皆さんからの信用を失って（そもそも信用があつたのかどうかは別問題としてですが）しまいました。昨年九月の鉄建公団訴訟判決から一年かかって、ギクシヤクはあつてもお互いに解決するために必要、と割り切つて作り上げた四団体の統一戦線的団結は今回の背信的行為で、修復までまた少し時間がかかることになってしまいました。

『団結』の質が問題

そうした紆余曲折はあってもようやくこれで裁判闘争・大衆行動による世論喚起・政治への働きかけを、当事者を中心として統一して取り組むための条件が揃いました。あとは私たちがこれを活かして解決に向けた本格的な団結をつくり上げることが求められます。問題はやはり団結の質です。

今回の本部の動搖の背景には、そもそもJR本体の国労機関役員の中に相変わらず「裁判をやる」と解決が長くなるし、JRとの労使関係改善の障害になる」との意見があり、同時に「(当事者の意見はどうであれ)国労が闘いと收拾の中心にならないのはおかしい」との、夜郎自大的「国労大国主義」意識が抜けきっていないことを表しています。実際に四団体(国労・建交労・国鉄闘争共闘会議・中央共闘会議)が横並びになること自体に拒否反応を示す役員が多いことがそれを示しています。そして残念ながら、そうした意識を払拭しきれない傾向が、本部に従ってきた闘争団を中心に色濃く残っています。団結の質が重要だとはそう言った意味でもありません。

当事者を中心とした闘いの判断を

今年は分割・民営化満二十年になります。とうぜん政府の側は「分割・民営化で国鉄は再生した」との総括を広めようとするでしょう。その時こそ「分割・民営化の負の遺産の一つとしての採用差別事件を解決せよ」と迫る闘いで道を切り開くことが重要です。しかも今年は闘争団の二次訴訟と全動労争議団の訴訟の判決が出ます。

鉄建公団訴訟控訴審と「採用差別国労訴訟」もまた法廷でのつばぜり合いに入ります。裁判を大衆行動で支え、世論を高めることで解決まで行き着くためにあと一踏ん張りします。

(『国労紋別闘争団通信』No.一五六号)

※原告団を支援・連帯してきた「国鉄共闘会議」は一月二七日、全国総会を開く。この日には国労が中央委員会を開催する。報告で述べられている国労本部がおこした裁判の内容がさらに明らかにされると思われる。

国労本部の裁判が実際におこなわれるのは、夏以降。それに対しすでに進行中の東京高裁の裁判は、二月五日に進行協議がおこなわれ、今後の裁判の日程が明らかになる。

(編集部)

◇ 編集部 だより ◇

▽連合労働運動、とりわけIMF・JC中心組織の自動車、電機、鉄鋼への信頼は連合内でも地に落ちた。

▽同じIMF・JCにいるJAMは「JCに依存していたら労働条件、生活は守れない」と、旧盟のゼンセン等と中小共闘を立ち上げ、今春闘では「新たな相場形成部隊」を目ざしている。

▽これに対し、日本経団連会長は「世界競争に勝つためには、安い労働力政策が必要」と、労働者・労働組合を挑発する。労資対立はおるか、階級対立、階級闘争との言葉は、「イデオロギーの多様化」とやらで抹殺された感があるが、「旧い」イデオロギーが復活するのは時間の問題である。

私と社会通信

― 仲人は灰原茂雄さん ―

私と社会通信（滝野さん）との出会いには、なんだか運命的なものを感じています。それは、九九年三月に灰原茂雄さんが大分に講演会に来たおり、私が日教組に頼まれ書いた原稿「人間らしいすばらしさ」を灰原さんに手渡したことから始まります。

詳細なことは良く思い出せないのですが、講演会が終わり主催者の内尾さん宅で反省会をした際に、ある方が労働運動（当時）の実態を嘆き灰原さんに助言を求めました。その時、灰原さんが、その方をえらく叱責されました。その方の想いと私の思いは、ほとんど重なるものであり、ある意味で私自身が叱責されている気分でした。厳しい議論の合間に、灰原さんは私の原稿をその場で読み切り「あなたは今のままで頑張りなさい」と優しく語りかけてくださりました。

それから二三日だったと思います。帰郷された灰原さんから一通の分厚いお手紙をいただきました。その中には、私の書いた原稿に対して数倍の分量で解説や助言を加えた文章と「三池闘争」の際に発刊された様々な文章が同封されていました。灰原さんは、私の文章を行間や字句まで事細かく推察して提言をしてくれました。私にとっては思いもよらぬ歴史的な背景と現状の関係までも解説していただいた手紙であり、大変にありがたいものでした。さらに、手紙には「あなたの文章を原文のまま、私の盟友である滝野忠さんに渡したい」と添えられていました。

「社会通信」という労働誌は、それまで何度か目にしたことはありましたが、その編集者の滝野さんとは面識さえありませんでした。灰原さんから手紙をいただいた数日後に、その滝野さんから電話をいただき同誌に掲載したい旨のお話がありました。断る理由もなく逆に恥ずかしささえ覚えたことを今でも思い出します。

その後、灰原さんや滝野さんとは、電話や手紙をやり取りする関係を持たせていただき、その年の六月九日に大分県で「社会通信読者の会」を開くことになりました。灰原さんを通じて、私が勝手にイメージした滝野さんの人物像は、失礼ですが「灰原さん同様の年格好」でした。従いまして、初めてお会いしたときには、あまりにもイメージと違ったものですから、変な驚きを覚えたものでした。

あれから八年、滝野さんには、私自身が当事者でもある「国鉄闘争」に対してどれだけの助言や提言をいただいたことか：また労働（民主化）運動全般の歴史と未来像に付いても、事あるごとに相談し合ってきました。

その社会通信が「発刊部数一〇〇〇号」を迎えます。日本の労働運動の総てを根底から直視してきた社会通信が示してきた「進路」…。その存在は、私たち労働者にいったいどれくらいの力を与えてくれたのでしょうか…？

きっかけを与えていただいた灰原さんは、今はもういません。その灰原さんから教えていただいた幾つかの教訓のなかで、最も私が大切にしている言葉があります。それは「現場に足を運び現場の声を聞きなさい」と言う言葉です。「それができるか否

かが、人（文章）の信頼性を決定的にする」ことを灰原さんから学びました。

私自身、国鉄闘争を通じて良くも悪くも、実に多くの人や組織に触れ合ってきました。その時々的情勢で「朝令暮改」平然と路線転換をしていく人々（組織）も同時に見てきました。その人たちに共通していえることは、「現場に足を運ばず」、「己の保身に勝てない」ということです。

「修善寺大会」や「四党合意」などという「本末転倒」：事実と当事者の想いを逆転させた事象のなかで、私たちは何度も消し去られようとなりました。そんな苦境に置かれた私たちにとつて、一貫して当事者の声を紙面で訴え続けてくれた社会通信（滝野夫婦）の存在が、どれほど私たちの支えになったことでしょう。

「社会通信が現場の声を反映させてくれた」といえば、それまでですが「現場に足を運ぶ」というお二人の意志がなければ、当然そのような紙面にはなり得ません。

いずれにしても、お二人がこの道一筋に三四年間（進路から通算）、時代の生き証人として世の中を複眼的な視点で見続け、全国の労働者へ発信し続けた「社会通信」が、一千号を迎えることは、大変なことだった拝察いたします。「おめでとうございます」とも、「ありがとうございます」とも、いえるご時勢ではありません。労働運動どころか、憲法までが両の目を閉じようとしている今だからこそ、ますます必要になった「社会通信」を、何時までも発信し続けてください。（国労大分原告団 赤峰 正俊）

◇ 読者からのおたより ◇

展望ひらく いつも「通信」ありがとうございます。敵よりも一歩でも長く闘い、抵抗を継続し仲間との団結を強化し、闘い続けることでしか展望は拓けないと思います。（東京・T）

編集部より 世界はすっかり様変わりしてしまいました。資本が好き勝手に動き回る時代に逆もどり。その典型が労働法制全面改悪です。それだけに矛盾は露骨にあらわれますよね。（神奈川・T）

教材 情勢把握等の教材として活用しています。今後ともよろしく。（神奈川・T）

編集部より 嬉しいお便りありがとうございます。さらにながらばります。注文寄せてよ。

労組のおかげで 企業定年を迎えてしまいました。闘いは続きますが、生きている限り、正しい事は正しく頑張る。労働組合のおかげで定年までいられた。感謝！（千葉・A）

編集部より Aさんも定年年齢ですか。企業人間から「自由人」への飛躍ですね。若者たちと労働組合のこと、さらに学び合ってください！

感想よろしく 時どき支部情報『仲間たち』を送っておりますが、感想などありましたらよろしくJPU鹿児島北部支部副部長で教宣部長しています。（鹿児島・K）

編集部より ニュース、いつも楽しく読ませていただいています。なぜかって、職場の問題を生きた記事にしていらつしやるから。「キビシイドリ」おもしろい！（本誌4頁）こんな「日刊」めずらしくなつた！組合員とともにこれからも活躍を。

短命にしたい 皆様、お元気でしょうか。山口県民になって二年が経ちました。山口産の総理大臣は八人目。短命にしたいですね。「今年は何んとかかなる」と信じてがんばりましょう。（山口・T）

編集部より おつしやるおどおり「短命」になりそう。すでに後継が自民党本部ではささやかれています。福田元官房長官、それとも小泉再登板。政党支持率は自民五〇％に民主は二〇％（日経）です。自民党は本当の所、恐れていないのでしょうか。

カンパ 一年分送金いたします。残額はカンパです。（東京・S）

編集部より カンパに感謝。あなたの十月後の帰属はお決まりですか。郵政、かつての国鉄とまったく同じ。「JPUスケア」、公社の機関紙みたいですね。

参院選 共産党の唯我独尊はウナツケルが、社民の参院選対応、きわめて残念。護憲派の統一戦線なしに展望はないはずなのに。（山形・C）

編集部より ご入金ありがとうございます。日本には統一戦線の経験がほとんどありませんもの

ね。悪い習慣をどう断ち切るか。下からの運動の盛り上がりが必要。マスコミひどい！ 教育基本法の改悪は全くひどい。自公は論外として、民主は本当につぶすきがあったのでしょうか？ 又、国会内外の連日の教師、市民、労組の反対の盛り上がりを見れば無視するマスコミもひどすぎます。(東京・H)

編集部より いろんな集会の数を合計してみました。北海道から沖縄まで教基法反対に参加した人びとは百万人を超えています。東京で数十万の集会がやれるくらいでないとマスコミは動きません。民主、連合の中心人物は教基法改悪に賛成。日教組、自治労に「遠慮」してホンネをいわないだけです。両労組は連合から「自立」した共闘組織をつくるべき。

集まる ○七年早々、私の職場も郵政集約合理化が実施予定。退職希望者は多いと聞く。青年部の頃、しきりに体制的合理化を議論したことを思い返す。今ではすさまじい資本主義競争の中で、現実のものとして肌で感じる毎日。すべてが競争、利益優先、賃金格差拡大、ボーナスへも反映。今日もミーティングで目標達成への叱咤(しった) 激励、あまりにもたてつけのしめつけを強めた結果、モノが言えない職場、暗い。私たちの役割は全通が職場活動の基本に置いた「五人組」、日頃持っている不平、不満、悩み等、みんなで言い合う。その手法は会議、集まり、飲み会、レクリエーション等、どんな形であつてもいい、とにかく集まり話し合う。その中から方針―解決への闘いを構築―を確立し、自己も反省、職場での集まりが減った。「人間らしい生活」を送るため集約的合理化を仲間とともに実現していきたい。(宮崎・K)

編集部より 競争がすべてを飲み込んでしまいました。現状はその反映です。労働組合は「競争を排除する」のが最大の任務。競争という台風は必ず被害をもたらさずにはおきません。その被害はKさんがおっしゃる活動を力にしてゆきます。足元からがんばり合いましよう。とにかく健康にご留意を！

七年で七つの職場 あい変わらず合理化の連続で、○六年七月には今までとまったく違う職種の仕事に配転になりました。この七年間で七つ目の職場です。でも何とか人間関係―いつでもどこでも―を築くことで働き続けられています。「社会通信」に載る多くの仲間にも励まされています。(鹿児島・T)

編集部より 渋谷での集まりにはN T Tの仲間が多く参加されます。N T Tの分社化の動き、いくら聞いてもわかりません。ご本人も「ぼくの所属は今どこだっけ」とおっしゃるくらいです。発展的解散 一九九一年六月二九日に発足いたしました労働者協同組合「おといねっぶ」は一五年間、組合員の皆様にはひとかたならないご支援、ご協力をいただきました。この度、労働者協同組合「おといねっぶ」を発展的に解散し、○七年一月一日よりN P O法人「e.c.o.おといねっぶ」として活動を進めて参ります。さらにご支援よろしく願います。(音威子府闘争団)

編集部より 新たなご出発に心から敬意。さらにながらばって。私どもも続きます。韓国公務員労組との交流から 新年は韓国公務員労組(麻浦支部)との交流からスタートします。開うエネルギーをもらう予定です。(東京・浜口 正幸)

編集部より 韓国労働運動は今、岐路にもあるようです。交流の報告、お願いします。歴史的要請に応えよう 二〇〇六年は歴史の大きな転換の年でした。私たちは「傍観者」ではありませんでした。○七年、時代は私たちに行動することをますます求めていくでしょう。大いに応えようではありませんか。集い、歌い、語り合いましよう。汗を流し風を切り、互いの声咳に触れ合いましよう。(大分・池田 年宏)

編集部より 私も池田さんのようにハツラツと前の進みたい。全身全霊をつくす 改憲・社会格差の原点である国鉄・分割民営化攻撃から四月一日で、丸二〇年を迎えます。この節目に年を、何としても勝利解決の年にするために、全身全霊をつくし頑張ります。(四国・中野勇人)

編集部より 解決への当事者は中野さんたち原告団です。解決めざし頑張り合おうよ。確かなものをつかみたい 世界の働く人々は大きく動き始めようとしています。中南米で韓国でヨーロッパで、日本でも、まだ小さくけれど「このままではいけない」と思う人々が武庫川ユニオンを訪ねるようになってきました。今年は確かなものをつかむ一年にしたい。(兵庫・小西 純一郎) 編集部より 武庫川ユニオンは労働運動再生への歴史の実験です。小西さんが「つかめ」ば、私どももつかめます。

政令市、市議選 新潟市は一二月議会で区名などが決まり、四月に政令市になります。合併建設計画、新潟駅高架事業、サミット誘致などの大型事業が目白押しです。私は大型事業優先から子どもやお年寄りや障がいのある方も暮らしやすい、子どもや孫に誇れる町作りに全力をあげます。

編集部より なにがなんでも勝ち抜いて。

(新潟・小林よしあき)

今こそ反撃を 今年も引き続き、環境問題、国鉄闘争、一人でも入れる労働組合ユニオン運動に全力を上げながら、「社会を変える」ことに専念したい。

(岡山・堀井 進)

編集部より ユニオン運動の課題について考えていることを次号で書きます。感想を寄せて。当局的執念 昨年八月飛ばされました。当局的執念に我が方も学ぶべきです。郵政局はすさまじい言葉につきまます。

(京都・T)

編集部より 日本労働運動最大の弱点は、「敗け」から学ばないこと。資本、政府はそれ幸いに同じ攻撃を執拗にかけてきているというわけです。

請願署名提出 昨年は「年金生活者や高齢者への大幅な負担増に経済措置」を求める三一二一筆筆に及ぶ請願署名を町議会に提出しました。残念ながら否決されましたが、引き続きその表現に向けて取り組む決意です。

(奈良・羽川 健治)

編集部より そのもよう「通信」にぜひ投稿してください。**がんばりつづける** 押されつばなしの階級情勢ですが、矛盾が吹き出しています。がんばりつづけます。

(鳥根・濱崎 忠晃)

編集部より 規制改革、構造改革は支配階級内での利権の再配分であること。連合労働運動にもほころびが見え始めました。

「生きています」 私たち家族、今年のキーワードは「健康」「生きています」です。九三歳を迎える母、「生きています人間」として精一杯心の介護をしてまいりたい。母の姿を通して私ども夫婦も健康の大切さ、「生きること」を噛みしめ日々歩んでまいります。

(神戸・小川 幸四郎)

編集部より 同じような賀状、たくさんいただきました。私どももそう。つれ合いの父は九三歳になりますもの。

ラテンアメリカへ 新年に、一千号を祝して半年ほど休刊として、ラテンアメリカを採訪して、熱風を直送してくれませんか。

(東京・原 野人)

編集部より 嬉しい提案。思案します。他の読者も意見寄せて。**改めて国鉄闘争** 小生、昨秋十月、鉄建運輸機構に対する闘争団の訴訟に、証人として責任を仰せつけられ、改めて国鉄闘争の検証をすることができました。闘争団諸氏の二十年の苦闘は、労働運動・社会運動の道標であると痛感します。

(神奈川・渡邊 和彦)

編集部より 証言、傍聴しました。被告(運輸機構)の代理人のなんといやらしいこと。さらに活躍を 今年もイラクに平和が訪れないまま新年を迎え残念でなりません。国内では核武装論議賛成の声が閣僚から起こる等、政治の右傾化が心配でなりません。「社会通信」何時でも勉強になります。

(東京・山口哲夫)

編集部より 激励ありがとうございます。労働運動内部にも矛盾が出てきたようです。これにどう喰らいつくかです。日教組、自治労は中小組合のように、独自の塊をつくる時です。

野次 定例議会一同僚議員から初めて「野次」をもらった。「町長が無いと言ってるんだから無いんだべ！」声を耳にして正直驚いたが、ここでは「議会の場での議論」の重要性をしつかり受け止めていただきたい。議会制民主主義の現代では、住民自らが選ぶ代表者を介して、住民が間接的に政治やまちの運営に係わり意見反映させることが最も大切なこと。行政の主導や首長の決定に留まらず、様々な住民の意見や実態・要望が盛り込まれたまちづくりが望まれる。公に発言する者の自己都合やエゴイズムによって議会運営が進むなどもつてのほか。議員経験一科目。

新人を育てるだけの器量もあつて然るべきと思うが…、さてよ、「野次」にも負けるな！」という配慮かな？

(北海道上川・安部 逸雄)

編集部より おつしやるように「野次」にも負けるな！との激励でしょう。メグズに頑張れ。**最大の財産** 私たちの財産は平和憲法。憲法を守る人を議会へ送りましょう。(長崎・永田 悦子)

編集部より 過日永田さんのこと長崎の仲間からうかがいました。お互い元気元気で頑張りたい。いのち、人権・平和 昨年は、早朝赤富士を見て、初体験の多い年でした(富士山頂への登山、鯛とシマアジの海釣り、栗生恵楓園訪問交流、柳生街道ハイキング、テレビに出演等々)。今年も健康であれこれ体験・挑戦してみのある年にしたい。そしていのち・人権・平和が大切にされる年をつくりたい、とくに憲法九条を世界への願いで微力ながらがんばりたい。(奈良・稲葉 耕一)

編集部より 私め、年末にレニングラード交響楽団の「第九」を久しぶりに聞きました。ベートーベン、気が充実していないとかえって疲れてしまいますね。モーツァルトとはえらい違いです。